『三國志演義』版本の研究
――建陽刊「花關索」系諸本の相互關係――

中川　諭

一

『三國志演義』の版本については、かつて鄭振鐸が「三國志演義的演化」[1]の中で述べた、「嘉靖本以後の諸本はすべて嘉靖本を祖本とし、外見上に變化があっただけで内容にはまったく違いはなく、清代に至り毛宗崗によってはじめて大きく改められた」という見解が定説のごとくみなされていた。したがって版本研究は『水滸傳』などと比べてあまり盛んではなかった。現存最古の版本の嘉靖本と通行本の毛宗崗本とを比較したものや、他のいくつかの版本を紹介したものがそのほとんどであった。[2] しかしその中にあって、小川環樹博士は「關索の傳説そのほか」[3]で、毛宗崗本成立以前の段階において、嘉靖本にはない關羽の架空の息子關索の物語が挿入されており、また一方でそれとは異なる形の關索説話を傳える異本も存在することを指摘された。そしてごく最近になって、日本では金文京氏・上田望氏および筆者の、中國では周兆新氏の研究が相繼いで發表された。

金文京氏は、まず小川博士が指摘された二つの「關索の物語」を仔細に検討し、そこから『三國志演義』諸本の問題點にも觸れられた。[4] そしてこれまで『三國志演義』の最善の版本とされた嘉靖本の失誤を擧げ、さらに建陽二十卷本の性格を述べられた。[5] 筆者は、原作から毛宗崗本が成立するまでにはいくつかの段階があったこと、嘉靖本は毛宗崗本の祖本ではないこと、建陽二十卷本は毛宗崗本が成立していく上で別系統に位置する版本であることを指摘した。[6] 上田望氏は、金氏と筆者の論をふまえた上で、『三國志演義』の諸本を六つのグループに分け、それぞれの分化を時間の移りかわり・地域的分布とともに追っていった。[7] また周兆新氏は、いくつかの建陽刊本と嘉靖本とを比較することにより、『三國志演義』のより古い形を考究された。[8]

ところで『三國志演義』の現存する諸版本を、金氏・上田氏・筆者の論考により内容・文章からグループ分けすると、やや特殊な『精鐫合刻三國水滸全傳』（『二刻英雄譜』、上田氏のいわゆるⅤ群）・毛宗崗本（同じくⅥ群）を別とすれば、次のようになろう。すなわち、

一、十二卷系諸本（二十四卷本を含む、[9] 上田氏Ⅰ・Ⅱ群）

㈠　周靜軒詩、十一の插入説話[10]なし

㈡　周靜軒詩、十一の插入説話あり

二、二十卷「花關索」系諸本（上田氏Ⅳ群）

三、二十卷「關索」系諸本（上田氏Ⅲ群）

である。このうち第一のグループは、毛宗崗本が成立していく過程にかかわる諸本で、㈠に屬するのは嘉靖本、㈡に屬するのは周曰校本のほか吳觀明本をはじめとする李卓吾批評本などである。第二のグループは、建陽二十卷本のうちいわゆる「花關索說話」[11]を持つもの、第三のグループは、建陽二十卷本のうちいわゆる「關索說話」を持つものである。

上田氏は六グループの間の異同を檢して系統圖を示されているが、[12]實は各グループの中での諸本の關係についてすら明らかでない部分が多い現段階では、上田氏の系統圖はひとつの試案として今後の檢證を待たねばならぬものと考える。筆者は先に揭げた三つのグループそれぞれの中での諸本の關係を明らかにした上で『三國志演義』諸本全體の關係を檢討しようと思う。先の三グループのうちの第一グループすなわち十二卷系諸本についてはかつてある程度明らかにしたので、[8]本稿では第二グループすなわちいわゆる「花關索」系諸本（上田氏のいわゆるⅣ群）に屬する各版本の相互關係と、そこから明らかになった二、三の點について述べてみたい。なお本稿において取り上げる版本は次の通り。（「　」内は略稱。以下略稱を用いる。）

①音釋補遺按鑑演義全像批評三國志傳[13]　二十卷　〔余象斗本〕

余象斗雙峰堂刊。存卷一―十二、十九、二十。封面に「按鑑批點演義全像三國評林」と題する。余象斗の敍および「三國辯」、目錄、「君臣姓氏附錄」あり、萬曆二十年の刊記あり。上評中圖下文。半葉十六行行二十七字。建仁寺兩足院（卷一―八、十九、二十）・ドイツ、ヴュルテンベルク州立圖書館（卷九、十）・イギリス、オックスフォード大學圖書館（卷十一、十二）ほか藏。孫楷第『中國通俗小說書目』（以下「孫目」と略）著錄。

②新刊京本校正演義全像三國志傳評林　二十卷　〔志傳評林本〕

余象斗雙峰堂刊、存卷一―八、十三―十八。「三國志宗寮」あり。上評中圖下文、半葉十五行行二十二[14]字。早稻田大學藏。孫目著錄。

③新鍥京本校正通俗演義按鑑三國志傳　二十卷　〔鄭少垣本〕

鄭少垣聯輝堂刊、封面に「刻三國志赤帝餘編」と題する。序、目錄・「君臣姓氏附錄」あり。萬曆三十三年の刊記あり。上圖下文、半葉十五行行二十七字。內閣文庫・蓬左文庫・尊經閣文庫・成簣堂文庫藏。孫目著錄。

④重刊京本通俗演義按鑑三國志傳　二十卷　〔楊閩齋本〕

楊春元閩齋刊。目錄、「三國志宗寮」あり。萬曆三十八年の刊記あり。上圖下文、半葉十五行行二十八字、內閣文庫・京都大學文學部藏。孫目著錄。

⑤新鍥京本校正通俗演義按鑑三國志傳　二十卷　〔鄭雲林本〕

鄭世容雲林刊、萬曆三十九年の刊記あり。後に述べるように、③の書肆名等のみ挖改したもので、③と同版。京都大學文學部藏。孫目著錄。

⑥新鍥京本校正按鑑演義全像三國志傳　二十卷　〔種德堂本〕

熊冲宇種德堂刊。存卷一、二。封面に「刻卓吾李先生訂正三國志／金陵萬卷書樓[15]藏板」と題する。また卷一卷頭には「東原　貫中　羅本　編次／書林　冲宇　熊成冶　梓行」と、卷二卷頭には「書林　種德堂　熊冲宇　梓行」と題する。李卓吾の序・目錄あり。上圖下文、半葉十五行、每半葉兩邊各一行行三十四字、中閒十三行行二十六字。北京圖書館藏。孫目未著錄。

⑦新刻湯學士校正古本按鑑演義全像通俗三國志傳　二十卷〔湯賓尹本〕
　卷一卷頭に「平陽　陳壽　史傳／東原　羅貫中　編次／江夏　湯賓尹　校正」と題する。序・「姓氏」・目錄あり。卷十一第五・六葉の版心下に「形□精舍」とある。上圖下文、半葉十五行行二十五字。北京圖書館藏。孫目未著錄。

また十二卷系グループと對照する場合は、

⑧新刻校正古本大字音釋三國志通俗演義　十二卷　〔周曰校本〕
　周曰校仁壽堂刊。封面に「全像三國志傳演義／書林周曰校刊」と題し、さらに萬曆十九年の周曰校の識語を載せる。目錄・序・「三國志宗寮」あり。半葉十三行行二十六字。內閣文庫・蓬左文庫など藏。孫目著錄。

を用いる。

二

本節ではまず右の①～⑤、孫目に著錄されている余象斗本・志傳評林本・鄭少垣本・鄭雲林・楊閩齋本の五種の版本の關係について述べる。

この五種の版本のうち、鄭少垣本と鄭雲林本については、すでに金文京氏が、

（鄭雲林本は鄭少垣本と）版式が等しく、書肆名のみ挖改の痕がみえる。おそらく同じ鄭氏の閒で版木を流用したのであろう。[16]

と述べておられ、また筆者自身もかつて京都大學文學部所藏の鄭雲林本を點檢し、金氏の述べられるごとく鄭少垣本と鄭雲林本は同版であることを確認した。そこで余象斗本・志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本の四種の關係を考えることにする。

まず四種の版本の閒に次のような相違點があることに注目したい。

卷六[17]、袁紹の長男袁譚を伐った曹操は、袁尙・袁熙を伐つべくさらに兵を幽州に進め、一方李典・樂進に命じて并州の高幹を攻めさせた。しかし高幹は壺口關を固く守っており、なかなか落とせない。知らせを聞いた曹操は自ら壺口關へ向かい、群臣を集めて高幹を伐つ協議をした。余象斗本は次のように描寫する（『　』については後文參照）。

○例一―㈠　卷六「曹操引兵度壺關」

……荀攸曰、「須用詐降計方可」操然之、喚降將呂曠・呂翔、附耳低言。呂曠『引兵數千、卽抵關下叫曰、「吾見袁尙輕視、故來降曹操、操多疑忌、吾今改過、思歸舊主、疾開關相納。」幹未信、二將卸甲棄馬而入見幹、言操之過。幹曰、「曹軍新至、何計破之。」曠曰、「乘軍心未定、今夜刼寨。曠等願爲先鋒」幹無智謀、果信其說。是夜起兵、敎二呂當先引路。幹自引兵萬□□□□□□曹寨。背後喊聲大振、伏兵四起。幹知中計、急回壺關、已被李典奪了。高幹奪路走脫、去投單于。幹到單于界、正迎北番左賢王、下馬拜伏、言說「曹操吞併境土、今欲侵犯王子他(地)面、望乞救援、同力剋復、以據北方。」左賢王曰、「吾與操自來無仇、何故犯吾地界。汝欲使吾與被結冤也。」默然不約。高幹思無路、去投劉表。行至上落、被都尉王琰殺之、將頭解送曹操。操封王琰爲列侯。并州既定、議擊烏丸、就拿袁熙・袁尙、以絕禍根。曹洪曰、「袁熙・袁尙兵敗將亡、勢孤力盡、今投夷狄、夷狄無親、則無所用。今引兵入番界、倘劉備說劉表引兵襲許、救應不及、爲患不淺矣。請回師勿征爲上。」郭嘉曰、「諸公言者悞矣。公雖震威於天下、而夷人恃其邊遠、不預爲隄防。因其無備、卒然攻之、可破滅也。且袁紹於』番邦有恩而無緣。袁尙・袁熙尙存、舍烏桓而往南征、尙兄弟因烏桓之衆助、於死主之

臣、以生蹋頓之心、恐青冀非己之有也。劉表坐談之客耳、自知英雄不足以禦備矣。重任之、則恐不能制、輕任之、則備不能用。雖虛國遠征、公無憂矣。」

内容を要約すると、荀攸が曹操に策を授け、曹操の命を受けて呂曠・呂翔が高幹に偽りの降参をして、高幹に夜のうちに曹操の陣を奇襲するよう進言する。高幹は二人を信じ、曹操を夜襲するが、待っていた伏兵に逆に攻められ、壺口關も奪われ、高幹は命からがら逃げる。單于左賢王に助けを求めるが容れられず、劉表を頼って荆州に向かう途中、高幹は殺される。并州を平定した曹操は、兵をさらに西へ進めて烏桓を頼っている袁熙を攻めようとすると、曹洪は、荆州の劉表と劉備が心配なので進軍を止めるよう諫める。しかし郭嘉は今すぐに烏桓を攻めるべきであると進言する。余象斗本はこのように描寫しており、周曰校本等の十二卷系諸本のグループも、若干の文字・文章の違いはあるが、内容はこれに等しい。しかし志傳評林本のこれと同じ個所は次のようになっている。

○例一―ロ　卷六「曹操引兵渡壺關」

……荀攸曰、「須用詐降計方可。」操然之、喚降將呂曠・呂翔附耳低言呂曠番邦有恩而無怨。袁尙・袁熙尙存、舍烏桓而往南征、尙兄弟因烏桓之衆助、於死主之臣、以生蹋頓之心、恐青冀非己之有也。劉表坐談之客耳、自知英雄不足以禦備矣。重任之、則恐不能制、輕任之、則備不能用。雖虛國遠征、公無憂矣。（傍點筆者）

この部分、鄭少垣本・楊閩齋本も志傳評林本とほぼ同じである。（ただ「袁尙・袁熙」を「袁熙・袁尙」に、「蹋頓」を「冒頓」に作る。）志傳評林本のこの部分を余象斗本と比べてみると、余象斗本の『引兵數千～且袁紹於』の部分、すなわち曹操が呂曠・呂翔に策を授けるところから高幹を伐って并州を平定、そして郭嘉の進言の途中まで、およそ三百七十六字が缺落している。[18] そして志傳評林本およびそれとほぼ同様の文章となっている鄭少垣本・楊閩齋本の「……呂曠呂翔附耳低言呂曠番邦有恩而無怨……」のところは文章・ストーリーがつながらなくなっており、こちらの脫落とみるのが當然で、余象斗本の加筆とは考えられない。この例だけからみれば、志傳評林本などの三本は余象斗本をもとにして脫落を生じたものと考えられる。

しかし事はそれほど簡單ではない。次に右とは逆の例を示してみたい。蔡瑁による暗殺計畫を知った劉備は、劉表のもとからこっそり逃げ、檀溪を越えて水鏡先生司馬徽の庵で一泊した。翌日趙雲が劉備を探しにやって來、劉備は、趙雲とともに新野へ歸ろうとするところである。（版本間の違いがわかりやすいよう、適宜空白をあけた。以下同じ。）

○例二　卷六「劉玄德新野遇徐庶」

余象斗本	志傳評林本
玄德辭了水鏡、與趙雲上馬離庄投新野來、行不到二十里、一彪軍至、乃關羽也。雲長尋至相見、訴說檀溪之事。	玄德辭了水鏡、與趙雲上馬離庄投新野來、行不到二十里、一彪人馬來到。玄德視之、乃張飛也。飛就跟。又行到二十里、一彪軍至、乃關羽也。雲長尋至相見、訴說檀溪之事。

引用個所、鄭少垣本・楊閩齋本は志傳評林本と同である。周曰校本は若干の文字の異同があるものの、ほぼ志傳評林本と同じである志傳評林本では、劉備が趙雲と新野へ歸る途中、まず張飛が迎えに現れしばらくして關羽も現れるとなっている。しかし余象斗本では志傳評林本

に見える「一彪人馬來到、玄德視之、乃張飛也。飛就跟、又行到二十里」の文が缺落し、關羽だけが劉備を迎えに現れるようになっている。余象斗本のままで讀めなくなっているわけではないが、周曰校本でも、まず張飛が迎えにやって來てそして關羽も現れるとなっていること、また余象斗本で缺けている文は、二度出てくる「到二十里一彪」の六文字に挾まれた部分であること、の二點から、二度出てくる同じ六文字を混同して生じた余象斗本における脫落（余象斗本に始まるかどうかどうかは別問題）と見てよかろう。よってこの例からは、志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本は余象斗本を祖本とするのではなく、むしろ逆のことすら考えられるのである。

以上のように、余象斗本から志傳評林本など三本が出たかのようにみえる部分がある一方、逆のようにみえる例も同時に指摘できる。これは余・志・鄭・楊四本は同じ「花關索」系諸本のグループに屬してはいるが、その一つのグループ内において、余象斗本と志傳評林本など三本は系統を異にしているということであろう。特に志傳評林本は余象斗本と同じく余象斗雙峰堂によって刊行された『三國志傳』[19]ではあるが、いわゆる余象斗本にもとづいて重刻したのではない。別の「花關索」系のある版本（おそらく現存しない）にもとづいて重刻し、さらに他の余象斗刊の小說のように上批中圖下文の版式[20]にしたてて新たに出版したのが志傳評林本なのである。

次に志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本の關係を見ていこう。夏侯惇が新野にいる劉備を攻めてきた。劉備は諸葛孔明の策に從って博望屯で夏侯惇を迎え擊ちこれを擊破、諸葛孔明も初手柄をあげ、全軍新野へ歸ってきたというところの一段を擧げる。

○例三　卷七「諸葛亮博望燒屯」

志傳評林本	鄭少垣本・楊閩齋本
孫乾・簡雍引新野父老出廓迎接、望塵遮道、拜舞踴躍而喜曰、「吾屬全生、皆使君得賢人之力也。」回至縣中、孔明曰、「夏侯惇雖然敗去、曹操必自引兵至矣。」玄德曰、「似此柰何。」孔明曰、「亮有一計、可敵操軍。」其計如何。	孫乾・簡雍引新野父老出廓迎接、望塵遮道、拜舞踴躍而喜曰、「吾屬全生、皆使君得賢人之力也。」回至縣中、孔明曰、「亮有一計、可敵操軍。」其計如何。

志傳評林本では、孫乾・簡雍らが劉備を迎えてみな縣城へもどると、孔明は、夏侯惇が敗れて歸っていっても、今度は曹操が自ら兵を率いてやって來るであろうと言い、劉備がどうしたものかとたずねると、それに對して孔明が策がございますと言う。ところが鄭本・楊本では「孔明曰、夏侯惇雖然敗去、曹操必自引兵至矣。」の十八字が脫落しており、縣城へもどるとすぐに孔明が「それがしに策があり、曹操軍に對抗できます。」と述べることになる。曹操配下の夏侯惇の軍勢を追いかえして新野に凱旋し、すぐにこの孔明の言葉では、話があまりに唐突すぎよう。しかも鄭少垣本で缺落している十八字は二度出てくる「孔明曰」の三文字に挾れた部分である。したがって十八字の缺落は鄭少垣本・楊閩齋本における脫誤であって、志傳評林本の方が元來の姿と言えるであろう。

次の例。孔明の計で博望坡で夏侯惇の軍を破ったものの、今度は曹操自ら大軍を率いて攻めてきた。勝ち目のない劉備は十數萬の民衆を引きつれて、新野を棄て樊城を經て漢津へ向かう途中、長坂橋までやってきた。曹操軍も追いついてきたが、張飛が馬に乘ったまま曹操軍

を一喝。張飛の勢いに怖けづいた曹操軍は退却し始めた。

○例四　巻七「張飛渭水斷橋」

志傳評林本	鄭少垣本・楊閩齋本
曹操聞翼德之名、飛馬望西而走。冠簪盡落。　張遼・許褚二將趕上、　扯住馬前環轡。　曰、「料張飛一人何足惶哉。請丞相急回、整理軍馬向前、劉備可擒也。」曹操方纔神色慌回。與張遼・許褚再來聚集軍馬。	曹操聞翼德之名、　望西而走。冠簪盡落。披髮逃生。聽得背後人馬趕來、驚得魂不着體。許褚・張遼二將趕上、扯住馬前環轡。曹操愴惶大驚。張遼曰、「料張飛一人何足懼哉。請丞相急回、整理軍馬進前、劉備可擒也。」曹操方纔神色滿面。與張遼・許褚再來招集軍馬。

なお引用個所、余象斗本は志傳評林本と同じであり、志傳評林本は鄭少垣本・楊閩齋本と比べて余象斗本により近い關係にあることが認められる。この例を見ると、鄭少垣本に見られる「披髮逃生、聽得背後人馬趕來、驚得魂不着體。」と「曹操愴惶大驚、張遼」の二個所が、志傳評林本（そして余象斗本）では缺落している。志傳評林本のままで文章が讀めなくなっているわけではないが、鄭少垣本の文章のような、曹操が髮を振り亂して逃げ、あとから追いかけてくる張遼・許褚をも一瞬敵の追擊と思って大あわてするという生き生きとした描寫の方がはるかにすぐれている。そしてその方が後の「曹操方纔神色滿面。」の一文が生きてこよう。確かにこの例の場合余象斗本・志傳評林本における簡略化なのか、鄭少垣本・楊閩齋本における加筆なのかはにわかには言い難い。しかし余象斗本や鄭少垣本などと系統をまったく異にする周曰校本[21]では、若干の文字の異同はあるものの、ほぼ鄭・楊本と同じであることから、鄭少垣本のように缺落のない文章が元來の姿であって、それが異なるそれぞれの系統に繼承され、建陽二十卷本の中では鄭・楊本がそれを傳えていると考える方が自然ではないだろうか。鄭少垣本や楊閩齋本が、特に讀めなくなっているわけではないこの個所だけを周曰校本等によって加筆したとは考えにくいであろう。（鄭・楊本には訂正すべき個所は他に數多くある。）すなわち例四の余象斗本や志傳評林本の文章は、鄭少垣本や楊閩齋本のような文章を簡略化したものと思われる。

このように例三・例四のような例が同時に存在することから、同じ「花關索」系諸本のグループの中で、志傳評林本と鄭少垣本・楊閩齋本の二本とは系統を異にしていると言うことができよう。

續いてこれまでの例では常にほぼ同じであった鄭少垣本と楊閩齋本の關係について述べてみる。卷九、赤壁の戰の後、劉備は孔明の計に從って荆州を占領した。孫權・周瑜は何とかして荆州を取り返そうとするがうまくいかない。その時吳のスパイが荆州から戻り、劉備の正室甘夫人が亡くなったことを報告した。周瑜は孫權の妹を劉備に輿入れさせるという名目で劉備を吳に呼び寄せ、そこで暗殺しようと謀る。吳の使者が荆州を訪れ劉備に來吳を要請。劉備は趙雲とともに吳へ乘りこんでいった。

○例五　卷九「劉玄德娶孫夫人」

鄭少垣本	楊閩齋本
時建安十四年冬十月初、劉玄德選快舡十隻、隨行五百餘人保護、	時建安十四年冬十月初、劉玄德選快船十隻、隨行五百餘人保護、

大將趙子龍、一並離荆州、前望南徐進發。荆州之事、一聽孔明裁處。玄德心中終是怏怏不安、早到南徐、舡已傍岸。子龍想曰、「適來時、孔明付來三條妙計、依次而行。今已到郡、必須先開第一個錦囊觀之、依計而行。」	大將趙子龍、一並離荆州、前望南徐。 船已傍岸。子龍想曰、「適來時、孔明付來三條妙計、依次而行。今已到郡、必須先開第一個錦囊觀之、依計而行。」

引用個所、余象斗本・志傳評林本は鄭少垣本とほぼ同じである。鄭少垣本では、劉備が五百人あまりのお伴と趙雲をひきつれて荆州から南徐へ向かい、南徐に到着して船を岸に着けたところで、趙雲は孔明からあずかった三つの錦囊の第一番めを開けてみようとする、となっている。一方楊閩齋本では鄭少垣本に比べて「進發、荆州之事、一聽孔明裁處、玄德心中終是怏怏不安、早到南徐」のおよそ二十六字が缺落しているが、これでは劉備たちが荆州から南徐に向かったところでもう船を岸に着けることになり、やや不自然な描寫と言えよう。しかも楊閩齋本で缺落している二十六字は、二度あらわれる「南徐」の二文字に挾まれた部分であり、おそらく二度あらわれる「南徐」を混同して途中を缺いてしまったものに違いない。したがってこの點から言えば鄭少垣本から楊閩齋本が出たかのごとくである。

次はこれと逆の例。十常待張讓・段珪たちは少帝と陳留王を洛陽から連れ去ったが、追いつめられて帝ら二人を途中で置いて自殺した。少帝と陳留王は崔毅に助けられ、二人を迎えに來た閔行とともに都へ向かった。その途中でのこと。

○例六―㈠　卷一「董卓議立陳留王」

鄭少垣本	楊閩齋本
離庄院行、行不到三里、司徒王允・太尉祖彪・左軍校尉淳信・中軍校尉袁紹、一行人衆、數百人馬、接着車駕、君臣皆哭。	離庄院行、行不到三里、司徒王允・太尉祖彪・左軍校尉淳于瓊・右軍校尉趙萌・後軍校尉鮑信・中軍校尉袁紹、一行人衆、數百人馬、接着車駕、君臣皆哭。

引用個所、余象斗本、志傳評林本は楊閩齋本と同じである。楊閩齋本では、都へ向かう少帝と陳留王を、王允・祖彪・淳于瓊・趙萌・鮑信・袁紹とその一行が無事迎える、となっている。ところが鄭少垣本では、楊閩齋本の「于瓊・右軍校尉趙萌・後軍校尉鮑」にあたる部分が缺落している。そして「淳于瓊」も「鮑信」も『後漢書』に名前の見える實在の人物であり（傳はない）、ここは鄭少垣本における誤脫とみるほかはない。したがってこの例六から言えば、楊閩齋本は鄭少垣本から出たものではなく、むしろ逆のことが考えられる。

このように矛盾する例が鄭少垣本と楊閩齋本の間に同時に存在しているところをみれば、この二つの版本は非常に近い關係ではあるが、繼承關係にあるのではなく、横に並ぶものと考えられよう。

以上、例一から例六までの六つの例にもとづき、余象斗本・志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本の關係を考えてきた。これら四種の版本は共通の祖本から出て派生したものには違いないが、いずれかの版本がいずれかの版本にもとづくという縱の關係にあるのではない。

三

本節では孫目未著錄、⑥北京圖書館藏の『新刻京本校正按鑑演義全像三國志傳』（種德堂本）について、その性格とグループ内における位置づけを述べてゆく。

この本は李卓吾の敍・冒頭の目錄・「君臣姓氏附錄」および本文卷一・卷二しか殘っていない。しかし目錄によって、二十卷二百四十則であることがわかる。また目錄の卷九には「關索荆州認父」の則題が見え、このことからこの本も「花關索」系諸本のグループに屬する版本であると考えられる。

熊氏の種德堂という書肆が出版した『三國志演義』についての早い時期の資料は、余象斗本の冒頭にみられる「三國辯」という文章である。[22] その全文は次の通り。

坊閒所梓三國、何止數十家矣。全像者止劉・鄭・熊・黃四姓。宗文堂人物醜陋、字亦差訛、久不行□。種德堂其書極缺陋、字亦不好、仁和堂紙板雖新、內則人名詩詞去其一分。惟愛日堂者、其板雖無差訛、士子觀之樂然、今板已矇、不便其覽矣。本堂以諸名公批評圈點校正無差、人物字畫、各無省陋、以海內士子覽之。下顧者可認雙峰堂爲記。（傍點筆者）

坊閒で出版された『三國志』は、どうして數十家にとどまろう。しかし全像のものはただ劉・鄭・熊・黃の四姓だけである。宗文堂の本は人物がみにくく、字も誤っており、久しく行われていない。種德堂の本はかなり缺陋があり、字もよくない。仁和堂の本は新しい印刷であっても、中身は人名や詩詞の一部が削られている。ただ愛日堂の本だけは版木に誤りがなく、士君子たちもこの本を讀んで樂しんでいたが、今ではもう版木が磨滅して、讀むのに不便である。本堂の本は諸名公の批評圈點でもって校正して誤りはなく、人物や字畫にも省略やでたらめもなく、海內の士君子に讀んでいただいている。ごひいきの方々雙峰堂をよろしく。

この文章中に「熊」という姓、「種德堂」という書肆名が見え、余象斗本の出版以前に熊氏種德堂で『三國志演義』を出版していたこと、そしてそれは上圖下文の全相本であったことがわかる。一方で北京圖書館所藏の種德堂本も熊成冶（沖宇）という人物が出版した上圖下文の全相本であった。この點だけからすると「三國辯」の中で觸れられている種德堂刊行の『三國志演義』がすなわち北京圖書館所藏の種德堂本であるかもしれない。しかし、現存種德堂本は封面で「卓吾李先生訂正」と題したり、李卓吾に假托した序文がある。李卓吾の著作を燒燬せよという勅旨が出されたのが萬曆三十年であり、[23] また「その死後（沒年は萬曆三十年――筆者）、『焚書』や『藏書』はもとより、李卓吾評の名を冠した小說・戲曲の類、また彼の著作と稱する僞書の類までが巷閒に隱然と流布しつづけ」[24] たのであるから、「李卓吾」の名を語る『三國志演義』の刊行は萬曆三十年前後かそれより後と豫想される。すなわち、今假りに余象斗本の刊行年を刊記どおりに萬曆二十年とすると、上田望氏も述べるように、[25] 現存種德堂本の刊行は余象斗本の刊行以後とも考えられる。熊成冶（沖宇）種德堂が刊行した書物の刊行年代は概ね萬曆元年から萬曆四十年の閒であると指摘されており、[26] 余象斗の雙峰堂が『三國志演義』を二度出版したように、熊氏の種德堂が余象斗本の刊行前に一度、余象斗本の刊行後にもう一度『三國志演義』を出版した可能性も否定できないのである。

では種德堂本の本文から他の版本との關係を見ていこう。最初の例

は、前節例六で鄭少垣本と楊閩齋本の文章を掲げたものと同じところ。種德堂本では次のようになっている。

○例六―㈡　卷一「董卓議立陳留王」

離莊院、行不到三里、司徒王允・太尉祖彪・左軍校尉淳于信・中軍校尉袁紹、一行人衆、數百人馬、接着車駕、君臣皆哭。（傍點筆者）

前節例六―㈠では、鄭少垣本の文章が、「淳于瓊」という人物名の途中から「鮑信」という人物名の途中までを誤って脱落しているのであった。そこで種德堂本の該當個所を見ると、鄭少垣本と同様に、人名「淳于瓊」の途中から人名「鮑信」の途中までを缺く誤りがあることがわかる。こうした誤りは鄭少垣本と種德堂本それぞれ別々に發生したとは考えにくい。やはり兩者は密接な關係にあり、どちらかの版本がどちらかの版本を繼承したもののように思われる。

そこで鄭少垣本と種德堂本の先後關係を考える上で、次の例を見てみよう。十常侍ばかりを重用する靈帝に對して諫議大夫劉陶が十常侍の處分を進言した。ところが靈帝は怒って劉陶の首を斬るよう命じた。劉陶が斬られようとする時、司徒陳耽が刑の執行を止め、帝を諫めるべく宮中へ入っていった。

○例七　卷一「何進謀殺十常侍」

鄭少垣本	種德堂本
耽曰、「天下之民、皆欲食十常侍之肉、陛下敬如父母、且十常侍身無寸功、皆封列侯、而封謂等結連黃巾、欲爲內亂。此理可容耶。陛下今不自省、漢社稷立見崩危矣。	耽曰、「天下之民、皆欲食十常侍之肉、陛下敬如父母、豈有此理。且十常侍身無寸功、皆封列侯、而封謂等結連黃巾、欲爲內亂。　陛下今不自省、漢社稷立見崩危矣。

引用個所、余象斗本、志傳評林本、楊閩齋本は種德堂本と同じであり、周曰校本など十二卷系諸本もほぼ種德堂本と同じである。この例を見ると、種德堂本の「陛下敬如父母」のあとの「豈有此理」が鄭少垣本にはなく、鄭少垣本の「欲爲內亂」のあとの「此理可容耶」が種德堂本にはない。このことによって兩者の文章が讀めなくなっているわけではない。しかしながら、鄭少垣本を除くすべての「花關索」系グループの諸本だけでなく、系統を異にする十二卷系グループの諸本においても、この個所については種德堂本のようになっており、鄭少垣本（ないしは鄭少垣本が直接もとづいた本）における書き改めと思われる。したがって先の例六で指摘できたこととあわせると、種德堂本から鄭少垣本が出たという可能性が考えられる。

しかし、鄭少垣本と種德堂本の間にそれと逆の可能性も指摘できる。それが次の例。場面は、例六に掲げたところの續き、少帝と陳留王は無事洛陽に歸ることができたが、今度は董卓が自ら實權を握らんとするために少帝を廢し陳留王を帝位に卽けようとしていた。

○例八―㈠　卷一「董卓議立陳留王」

鄭少垣本	種德堂本
董卓招何進・何苗部下之兵、盡歸掌握。董卓召李儒曰、「吾欲廢帝立陳留王、如何。」李儒曰、「今朝廷無主、不就此時行事、遲則有變矣。……」	董卓招何進・何苗部下之兵、盡歸掌握。　卓召李儒曰、「今朝廷無主、不就此時行事、遲則有變矣。……」

引用個所、余象斗本・志傳評林本・楊閩齋本は鄭少垣本と同じである。この例の鄭・種兩本の文章を比べてみると、種德堂本では、鄭少

垣本に見られる「吾欲廢帝立陳留王、如何。李儒曰」の十三文字が缺落している。これでは本來董卓に意見をたずねられた李儒が董卓に事を急ぐよう促すセリフが、董卓自身が李儒に向かって事を急ぐよう促すセリフにかわってしまい、意味をなさない。しかも種德堂本で缺落している十三文字は二度出てくる「李儒曰」に挾まれた部分であり、この三字を混同して誤って脫落したのに相違あるまい。この例から、種德堂本から鄭少垣本が出たという可能性が否定される。

以上例六・七・八で指摘したことにより、種德堂本と鄭少垣本は密接な關係にあるが、兩者は先後關係にあるのではないと言える。

四

本節ではやはり孫目未著錄の⑦北京圖書館藏『新刻湯學士校正古本按鑑演義全像通俗三國志傳』（湯賓尹本）について述べる。この本の外見的特徵については、すでに金文京氏、周兆新氏が紹介されているので、[22]それは兩氏の論考にゆずり、本稿では湯賓尹本の文章からその特徵と他の版本との關係をみていくことにする。

第二節で掲げた例一において、志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本にはおよそ半葉分にあたる三百數十字の脫落があることを指摘した。それでは湯賓尹本の例一と同じ個所はどのようになっているのだろうか。次にそれを示してみる。

○例一―㈡　卷六「曹操引兵取壺關」

……荀攸曰、「須作詐降計方可。」操遂喚降將呂曠・呂翔、附耳低言。『時操欲回兵征劉表、郭嘉曰、袁氏』於番邦有恩而無怨。袁熙・袁尙因烏桓之助、以死主之臣、以生躁頓之心、恐靑冀非己之有也。劉表坐談之客耳。知自英雄。不能用之。雖虛國遠征、公無憂矣。」

（『　』後文參照）

湯賓尹本のこの個所を見ると、余象斗本のような、曹操が高幹を攻め高幹が敗れて逃げるという話はない。しかし志傳評林本などでは脫落していたところに『時操欲回兵征劉表、郭嘉曰、袁紹於』という十三字を補って、とりあえずは文章は讀めるようにはなっている。とはいえ引用個所の前には、高幹が守る壺口關を樂進と李典が落とせないでいるところへ曹操自ら兵を率いてやって來、高幹攻擊の軍議をする、という場面があり、この湯賓尹本のような修訂では、高幹征伐の話から突然劉表征伐の話へとすりかわり、唐突の感をぬぐえない。したがって、まず余象斗本のような完全な文章があって、その後志傳評林本などに見られるような大幅に（半葉分）脫落した文章があらわれ、それから湯賓尹本のように大きな脫落を修訂してつじつまをあわせた文章ができたという經過が想定される。つまり、余象斗本は湯賓尹本が直接もとづいた版本とはなりえない。また湯賓尹本は「花關索」系諸本の中でも一段階遲い版本なのではないかと考えることもできよう。

それでは湯賓尹本は志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本のいずれかに直接もとづいたのであろうか。次の例を見てみよう。曹操は曹操暗殺計劃の主謀者のひとり劉備を伐つために徐州へ攻めてきた。小沛にいた劉備は曹操軍に奇襲をしかけたが失敗、袁紹を頼って靑州へ行った。徐州を下した曹操は、續いて關羽が守る下邳を攻めようとこれを圍んだ。しかし曹操は關羽の人柄を愛し、降參させて自分の配下に加えようとしていた。張遼が關羽を說き伏せに行き、今ここで死ぬのは三つの罪にあたるから曹操に降參するべきであると勸める。

○例九　卷五「張遼義說關雲長」

周曰校本	志傳評林本	鄭少垣本	湯賓尹本
遼曰、「……兄豈不是負却孤主、而背當年之誓乎。誤主喪身、誠爲不美、其罪一也。昔者劉使君以家眷付託於兄、以爲萬全之計、兄今戰死、二夫人無所依托、若能守節、一死無疑。若不守節、又屬他人。此是兄負却劉使君倚托之重、實爲不義、其罪二也。兄武藝超群、更兼深通經史、不思期共使君匡扶漢室、拯救生靈、徒欲赴湯蹈火、以成匹夫之勇、上負祖宗、下辱其主、安得爲義。其罪三也。	遼曰、「……兄豈不是負却孤生、而背當年之誓。誤主喪身、誠爲不美、其罪一也。兄武藝超群、更爲深通經史、不思共使君匡扶漢室、拯救生靈、徒欲赴湯蹈火、以成匹夫之勇、上負祖宗、下辱其主、安得爲義。其罪三也。	遼曰、「……兄豈不是負却孤主、而背當年之誓。誤主喪身、誠爲不美、其罪一也。兄武藝超群、更爲深通經史、不思共使君匡扶漢室、拯救生靈、徒欲赴湯蹈火、以成匹夫之勇、上負祖宗、下辱其主、安得爲義。其罪三也。兄有此三罪、弟不得不告之。」	遼曰、「……豈不負孤主、而背當年之誓。其罪一也。兄武藝超群、更深通經史、不思共使君匡扶漢室、拯救生靈、徒欲赴湯蹈火、以成匹夫之勇、上負祖宗、下辱其主、安得爲義。其罪三也。兄有此三罪、弟不得不告之。」

周曰校本	志傳評林本	鄭少垣本	湯賓尹本
其罪二也。上負祖宗、下辱其主、安得爲義。其罪三也。兄有此三罪、弟不得不告之。」	其罪二也。上負祖宗、下辱其主、安得爲義。其罪三也。兄有此三罪、弟不得不告之。」	其罪二也。上負祖宗、下辱其主、安得爲義。其罪三也。兄有此三罪、弟不得不告之。」	其罪二也。上負祖宗、下辱其主、安得爲義。其罪三也。兄有此三罪、弟不得不告之。」

引用個所、余象斗本は志傳評林本と同じである。楊閩齋本は鄭少垣本と同じである。また周曰校本は卷三。ここに引用した張遼が關羽に三つの罪を說くセリフにおいて、志傳評林本そして余象斗本には「第二の罪」にあたるものがなく、「第一の罪」の次がいきなり「第三の罪」になっている。一方周曰校本を見ると、「かつて劉使君が家族を貴殿に托して萬全をはかったのに、貴殿が今戰って死ねば、二夫人は賴る人をなくし、もし貞節を守るのであれば死ぬ以外になはく、もし貞節を守らなければ他人のものとなってしまう。それでは劉使君が依託された信賴に負くことになる。誠に不義ではないか。」という「第二の罪」がある。この一段では、周曰校本のような文章が本來の形であり、余象斗本や志傳評林本（ないしは兩本共通の祖本）で「其罪一也」の四文字と「其罪二也」の四文字を混同して、その間に挾まれる「第二の罪」を脫落してしまう誤りが生じたのであろう。鄭少垣本のこの個所は、やはり余象斗本や志傳評林本のように周曰校本に見られるような「第二の罪」はない。しかし本來ならば「第三の罪」であるところの「兄武藝超群〜」から「〜安得爲義」までを二つに分け、「〜以成匹夫之勇」までを「第二の罪」とし、そのあとを「第三の罪」としてつじつまを合わせている。楊閩齋本も鄭少垣本同樣になっている

ことから、鄭少垣本と楊閩齋本に共通する祖本において「第二の罪」が脱落している誤りに氣づき、やや小細工を施してなんとか數をあわせて、鄭少垣本や楊閩齋本のような文章ができあがったものと思われる。さて問題の湯賓尹本のこの個所は、鄭少垣本や楊閩齋本と同様に「第二の罪」の脱落を訂正した形になっており、余象斗本・志傳評林本は湯賓尹本の直接の底本とはならないということを物語っている。

次の例。孫權は赤壁の戰いの後、合肥において曹操軍と小ぜりあいを續けていた。ある時、張遼が李典・樂進を連れて攻めてきた。孫權は宋謙・賈華と迎え擊つ。太史慈も孫權の援護にあらわれたが、合戰の末宋謙が討ち死にし、吳軍は一旦引きあげた。しかし太史慈は宋謙の仇を取るために、再び擊って出て張遼と戰おうとする。

○例十　卷九「孫權合肥大戰」

全象斗本	鄭少垣本	楊閩齋本	湯賓尹本
諸葛瑾曰、「張遼非一勇之夫、乃足智多謀之士、恐有準備、不可造次。」太史慈堅執要行、權亦傷感宋謙之故、急欲報仇、故令太史慈領兵五千、連夜去爲外應。	諸葛瑾曰、「張遼非一夫之勇、乃足智多謀之士、恐有準備、不可造次。」 太史慈領兵五千、連夜去爲外應。	諸葛瑾曰、「張遼非一夫之勇、乃足智多謀之士、恐有準備、不可造次。」 太史慈領兵五千、連夜去爲外應。	諸葛瑾曰、「張遼乃足智多謀之士、恐有準備、不可造次。」太史慈堅執要行、權亦傷　宋謙之故、急欲報仇、故令太史慈領兵五千、連夜去爲外應。

志傳評林本の卷九は傳わらない。この一段の鄭少垣本と楊閩齋本の文章を見ると、余象斗本に見られる「太史慈堅執要行、權亦傷感宋謙之故、急欲報仇、故令」の二十一字が缺落しており、諸葛瑾が進軍を止めると太史慈が兵五千を率いて出ていった、となって、文意が通じなくなっている。しかも鄭少垣本や楊閩本で缺落している二十一文字は、二度出てくる「太史慈」の三文字に挾まれた部分であるから、前後の「太史慈」三文字を混同してその間を脱落した誤りに違いなく、余象斗本のような文章がもとの形であろう。そこで湯賓尹本のこの個所を見ると、余象斗本とほぼ同じで、鄭少垣本や楊閩齋本に見られるような脱落はない。このことから、湯賓尹本は鄭少垣本や楊閩齋本に直接もとづいた版本ではない、ということがわかる。

それでは湯賓尹本と種德堂本の關わりはどうであろうか。前節の例八に掲げたのと同じ個所を湯賓尹本は次のように作る。

○例八―㈡　卷一「董卓議立陳留王」

董卓招何進之兵、盡歸部下、召李儒曰、「吾欲廢帝立陳留王、何如。」李儒曰……

先に示したように、この個所は種德堂本では二度出てくる「李儒曰」の三文字を混同し、「帝を廢し陳留王を立てようと思うのだが、どうじゃ。」という董卓のセリを脱落していた。ところが湯賓尹本はこの董卓のセリフを脱落することなく、他の諸本のように正しい記述になっている。したがって湯賓尹本は種德堂本を直接の底本とするものではないと考えられる。

以上例一―㈠・九・十・八―㈡によって示したことから、湯賓尹本は余象斗本などと同じ「花關索」系諸本のグループに屬する版本であるが、その中でも一段階遲い版本であること、しかし現在見ることの

できる「花關索」系の余象斗本・志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本のいずれにももとづくものではない、という湯賓尹本の性質を指摘することができる。

ところで「花關索」系グループに屬する諸本の文章は、基本的に繁簡の差はないのであるが、[23] 湯賓尹本の場合はやや事情が異なるようだ。というのは、湯賓尹本の文章は他の「花關索」系グループ諸本の文章に比べて少々簡略になっているのである。[24] このことを先に掲げた例九・十で示してみると、例九の志傳評林本や鄭少垣本にはある「拯救生靈」の四文字が湯賓尹本にはなく、例十では、余象斗本・鄭少垣本・楊閩齋本には諸葛瑾が張遼を評した「一夫之勇」（余象斗本では「一勇之夫」に作る）という語句がみられるが、湯賓尹本にはそれがない。そして全體の意味としては變わっていないのである。

もう少しわかりやすい例を擧げよう。黄巾賊討伐のための義勇軍募集の知らせが涿縣にもやってきた。劉備がその立て札を見ていた時、土地の豪族張飛に聲をかけられた。二人は意氣投合し、ともに事を起こそうと誓った。關羽初登場の場面である。

○例十一　卷一「祭天地桃園結義」

余象斗本	湯賓尹本
飛邀玄德入酒店。　正飲閒、見一大漢推一輛車、到店門外倚下車子、入來飲酒、坐在桑木橈上、喚酒保、「疾篩酒來。我待趕入城去充軍、怕遲了。玄德看其人、身長九尺三寸、鬚長一尺八寸、面如重棗、若塗硃、丹鳳眼、臥蠶眉、　相貌堂堂、威風凜凜。玄德就邀同坐、問其姓名。其人言曰、「吾姓關、名羽、字壽長、後改爲雲長、蒲東解良人也。因本處豪霸倚勢欺人、關某殺之、逃難江湖五六年矣。今聞召募義士破黄巾賊、欲往應募。」　以遂己志告之。	飛邀玄德入　店、飲酒。正飲閒、見一大漢　下馬　入店　喚酒保、「快釃酒來。我待進城　投軍、伯遲了。玄德看其人、身長九尺三寸、鬚長一尺八寸、面如重棗、若塗硃、丹鳳眼、臥蠶眉。玄德見其相貌魁偉、就邀同坐、問其姓名。其人　曰、「某姓關、名羽、字　雲長、河東解良人也。因本處豪霸倚勢欺人、被吾殺之、逃難江湖　數年矣。今聞招募義士破　賊、欲往應募。」玄德遂以己志告之。

志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本は余象斗本とほぼ同じである。この一段、劉備と張飛が酒店で酒を飲んでいる時に一人の大男（關羽）がやってきたくだり、余象斗本は「見一大漢推一輛車、到店門外倚下車子、入來飲酒、坐在桑木橈上、喚酒保、〃」となっているが、湯賓尹本は「見一大漢下馬入店、喚酒保」と簡略に描いている。また劉備が見た關羽の様子は、余象斗本が「相貌堂堂、威風凜凜」であるのに對し、湯賓尹本は單に「相貌魁偉」となっているだけである。關羽が名のって自分の字を告げるところも、余象斗本は「字壽長、後改爲雲長」とあるのに對し、湯賓尹本ではただ「字雲長」とだけ記している。このように湯賓尹本に比べてやや簡略になってはいるが、内容に大差があるわけではない。

ただ引用個所の最後の部分、余象斗本は「以遂己志告之」となっており、やや讀みづらいが、關羽が「己の志」を告げたようになっているのに對し、湯賓尹本は「玄德遂以己志告之」となっており、余象斗本や他の「花關索」系諸本と異なる。實は周曰校本等の十二卷系諸本のこの個所は湯賓尹本と同様「玄德遂以己志告之」となっている。こ

の兩様を比べてみると、湯賓尹本を除く「花關索」系諸本の方がどうしても不自然でぎこちなく、おそらく「玄德遂以己志告之」が本來の形であろう。「花關索」系諸本の中では湯賓尹本だけがそのの本來の形を傳えたとも考えられるが、あるいは、湯賓尹本が直接もとづいた底本もこの個所を他の「花關索」系諸本と同様「以遂己志告之」に作っていたのだが、この個所が讀みづらいため、湯賓尹本の編纂者が十二卷系諸本等「玄德」の名のはいったテキストを見て訂正したのではないだろうか。確かに建陽本『三國志演義』は「誤りを一々訂正するような殊勝なテキストでは決してない。」[30]けれども湯賓尹本の本文がやや簡略になっていることから、湯賓尹本の編纂者の手が入っているに相違ないだろう。また、先に示した例一―㈡のように大幅な文章の脱落のために讀めなくなったところを修訂した例もあり、編纂者が本文を簡略にした際讀めない個所を訂正した（必らずしも周到なものとは言えないが）ということも十分に考えられる。編纂者が本文をやや簡略にしたり訂正したりしたというのも、湯賓尹本の特徴のひとつとして擧げられるのではないだろうか。

五

以上で本稿で取りあげた七種の版本の關係を具體的に示しえたと思う。それをもう一度まとめてみると、まず余象斗本・志傳評林本・鄭少垣本・楊閩齋本・種德堂本の五種の版本は、相當の共通性が認められるが、いずれかの版本がいずれかの版本の底本になるのではなく、あるひとつの祖本からそれぞれ分かれ出た版本であって、横の關係にあると考えるべきである。また鄭雲林本は鄭少垣本の版木をそのまま用いた本、すなわち鄭少垣本と鄭雲林本は同版である。そして湯賓尹本は他の六種の版本を直接の底本としないが、それら六種の版本よりも一段階遅れる版本である。

これら七種の版本は、すべていわゆる「花關索說話」が存在していること、[31]そして筆者がかつて指摘した嘉靖本にはなく、周曰校本や『李卓吾先生批評三國志』に見られて毛宗崗本へと受け繼がれていく十一の挿入說話が見られない、というストーリーの上での共通性がある。またその文章も、本稿では各版本間の相違、特にある版本の誤りによって生じた相違に焦點をあてて論じたのであるが、そうした相違點の二十卷の作品全體に占める割合はさほど大きなものではない。やや簡略化されている湯賓尹本を除けば、他の六種の版本の文章は基本的に同じと見なしてよかろう。湯賓尹本の文章も、他の六種の版本のような文章に手が加えられたものと考えられる。このようなことからして、七種の版本に共通するあるひとつの祖本とは、ストーリーの上ではいわゆる「花關索說話」を持つが十一の挿入說話はなく、文章も湯賓尹本を除く六種の版本のようであり、かつ誤りや修訂のより少ないもので、これを「二十卷花關索系祖本」と呼ぶことにしたい。『三國志演義』の原作から「花關索說話」や周靜軒詩が挿入されたりして「二十卷花關索系祖本」が成立し、そこから數段階を經て現存する二十卷「花關索」系諸本ができあがったのである。現存する七種の「花關索」系諸本は、基本的には先述のように横ならびの關係ではあるが、そこには親疎遠近の關係は認められる。それを圖示すると左のようになろう。

六

本稿では、福建の建陽で出版された二十卷本『三國志傳』のうち、いわゆる「花關索說話」を持つ二十卷「花關索」系諸本の現存する七種の版本を比較し、それらに共通する祖本を想定した。建陽二十卷本にはこの他にいわゆる「關索說話」を持つ二十卷「關索」系諸本があり、このグループに屬する諸本の關係を明らかにすることも必要である。その上で、これら建陽二十卷本の二つのグループの關わりあいや、[32] 十二卷系諸本のグループも含めた『三國志演義』諸本全體の關わりあいを考えていくのもこれからの課題である。これらについて本稿ではまだ觸れることはできなかったが、今後こうした問題を究明していくことによって、現存する版本以前の『三國志演義』の版本の變遷過程、さらにはそれに付隨する小說史上のさまざまな問題を窺い知ることができるのではないかと思う。

注(1)　『小說月報』二十卷十號、一九二九年。

(2)　詳細は、中川諒・上田望編「『三國志演義』研究文獻目錄稿」(『中國古典小說研究動態』第四號、一九九〇年) および「同訂補」(同第五號、一九九一年) 參照。

(3)　小川環樹著『中國小說史の研究』(岩波書店、一九六八年) 所收。原載は、小川・金田譯、岩波文庫『三國志』(舊版) 八冊附錄。

(4)　金文京『花關索傳の研究』「解說篇」(汲古書院、一九八九年)。

(5)　金文京「『三國演義』版本試探——建安諸本を中心に——」(『集刊東洋學』第六十一號、一九八九年)。

(6)　拙論『三國演義』版本の研究——毛宗崗本の成立過程——(『集刊東洋學』第六十一號、一九八九年)。なおこの論文で「建陽」を「建安」としたのは誤りで、余象斗の雙峰堂などの書肆があったのは建陽である。ここで訂正しておきたい。

(7)　上田望「『三國演義』版本試論——通俗小說の流傳に關する一考察——」(『東洋文化』第七十一號、一九九〇年)。

(8)　周兆新「舊本《三國演義》考」(周兆新著『三國演義考評』北京大學出版社、一九九〇年) 所收。

(9)　二十四卷本の二卷が十二卷本の一卷に相當し、插入詩・插入說話を除けばその他にほとんど差はない。したがってこの兩者は同系統とみなされる。

(10)　十一の插入說話については、注(6) 前揭拙論參照。

(11)　花關索說話・關索說話については、注(4)・(5) 前揭金氏論文參照。

(12)　注(7) 前揭上田氏論文。

(13)　余象斗本の正式書名はこれまで『新刻按鑑全像批評三國志傳』として紹介されることが多かったが、これは余象斗本の卷二以降の卷頭書名である。卷一卷頭の書名はここに示したとおり。

(14)　孫目に「行二十五字」とあるのは誤植であろう。

(15)　金陵の萬卷書樓と言えば、周曰校の書肆名 (仁壽堂の別名か) である。しかし種德堂は、他の種德堂刊行の書物からして、紛れもなく建陽

にあった書肆である。周曰校との關係は現在のところ不明。書名に「京本」とあるように、南京刊行の本を裝ったものか。

(16) 注(5)前掲金氏論文。

(17) 以下卷數は特にことわらないかぎり二十卷本のものを示す。

(18) この脱落は余象斗本卷六第十六葉表の七行めから十六葉裏の五行めまでにあたる。そのまま余象斗本の丸一葉ないし半葉にあたるものではない。

(19) 各卷頭に「閔　文台　余象斗　校梓」などと題する。

(20) たとえば『京本增補校正全像忠義水滸志傳評林』や『新刊京本春秋五覇七雄全像列國志傳』などがある。

(21) 注(6)前掲拙論參照。

(22) 余象斗本の序文は上下二段に分けられ、上段が「三國辯」、下段が余象斗自身による序文となっている。「三國辯」については金氏も注(5)前掲論文で觸れられている。

(23) 『明實錄』卷三六九「神宗實錄」萬曆三十年閏二月。

(24) 溝口雄三「李贄――正統ゆえの異端」(日原利國編『中國思想史』下べりかん社、一九八七年)。

(25) 注(7)前掲上田氏論文。

(26) 方彥壽「壽建陽熊氏刻書述略」(『古籍整理與研究』第六期、中華書局、一九九一年)所載の「歷代熊氏刻本總錄」による。なお、この方氏の「總錄」およびそのもとづいた資料のひとつである杜信孚『明代版刻總錄』(江蘇廣陵古籍出版社、一九八三年)では、種德堂本と湯賓尹本を混同して湯賓尹本を熊冲宇種德堂刊とするが、これは誤り。

(27) 注(5)前掲金氏論文および注(8)前掲周氏論文參照。

(28) 金氏は注(5)前掲論文の中で「わずかの例外を除いて同文同內容である。」と述べておられる。

(29) 筆者は現在、二十卷「關索」系諸本のグループが『三國志演義』の文簡本に相當するのではないか、という考えを持っている。しかし湯賓尹本の簡略さの程度は二十卷「關索」系諸本ほどではなく、したがって湯賓尹本が『三國志演義』の文簡本に相當するというのではない。なお『三國志演義』の文簡本については、稿を改めて述べたい。

(30) 注(5)前掲金氏論文。

(31) 「花關索」系諸本では卷十四の「劉先主興兵伐吳」の一則に、關興が關索の死を劉備に報告する場面がある。「關索」系諸本では卷十五の「孔明興兵征孟獲」の一則で、關索が初めて登場する。すなわち兩者の關索の登場のしかたには甚だしい差がある。志傳評林本は「花關索說話」のある卷九を缺いているが、卷十三などにみられる關索の登場のしかたは、鄭少垣本などと一致する。したがって志傳評林本の卷九には「花關索說話」があったはずである。

(32) 上田氏は、「花關索」系諸本を「新閩本」、「關索」系諸本を「舊閩本」と呼んでいる。しかし注(29)で述べたように「關索」系諸本が『三國志演義』の文簡本にあたるとすれば、「舊閩本」・「新閩本」という言い方は考え直す必要であると思う。